

〔討論〕

高藤　まず、「集落再編成の実態」ということで、大川さんから主として小国の事例、とくに滝と大石沢という二つの部落の再編成のプロセス、その移転のきっかけとなったことや、その条件、その他いろいろ詳しくお話し頂きます。最後に村研の共通課題「村落生活の変化と現状―その主体的再編成をめぐる―」と関連させながら問題点の指摘があったわけですが、そこに入る前に一応事実関係の確認をしておきたいと思います。私も実は昭和四四年の真冬に小国に行ったんですが、雪が深くて山に入れなくて役場で話を聞いただけで、その後ずっともう行っておりません。ただ、そのときの役場での話によれば、

集落再編成といっても集落自体を町の中心部に都市計画の団地を作って収容するというもので、奥の方の部落をいろいろ寄せ集めて、しかもそこに町場の人も入れて作る方針だということでした。だから、集落再編成といっても、実は町の、都市近郊の団地作りとあまり変りないんじゃないかという感じがして、一寸関心が削がれたという記憶があるんですが、この都市再開発事業で町場に作られた幸町の団地というのは何戸ぐらいなんですか。

大川 ここは全体として二〇〇戸にして行こうということらしいんですが、実は集落から入ったのはそんなにはないんですね。このことをみると、たしかに集落からの人を入れたのが、どういう意味を持っているのかなっていう気はします。ただ、町のもくろみとしては、普通の市街地の住民というのは、コネクションというか、人間的な相互関連というのが稀薄になってしまっているから、新しい集落を機能的な集落として再編して行くためには、とにかくそういう体験を持っており、しかもなおかつ今でもそうした関係を持たないと夏山を持統できないという集落の人たちを核にしようという発想があって、彼らをまきこんで行ったんですね。もちろん、そうしたことが本当にできるのかどうか、それが実際のところ問題なんですけど、ともかく、今でもいろんな農作業にあわした行事があるわけで、そういう行事に新しくできた集落の人たちをまきこんでやって行こうとしていることだけは確かです。ただ、そんなことぐらいで、新しいコミュニティ作りの基礎にすることができるとかどうかということになると、私も疑問に思いますかね。

齋藤 もう一つ、その夏山冬里方式ということなんですけど、その夏山の経営状況、土地利用状況っていうのは、どうなんですか。たとえば水田なんか非常に悪条件のそこだと思ってるんですが、例の減反政策その

ほかで、水田そのものがすっかり放棄されてしまっているのかどうかっていうことですね。つまり、夏山といっても実際は山菜採りぐらいだけになってしまっているかどうかですね。

大川 これは私もまだ山に登っていないので、実感として何ともはつきりしたことはないんですが、聞き取りをしたところやデータによれば、水田は二反区画に基盤整備したんですね。そこで小型の機械で何とかやれるってことになってるんですね。ただ、私の行った家なんかでは、ほとんど老人だけなんで、それを下の部落の人に小作っていか請負耕作させて、若干のまあ飯米部分をとる程度の田んぼだけを自分たちが夏山に行っ手入れをし、あとは山菜採りをしているという格好のようですね。だから、そういう意味でも世代交代の過程で、こうしたパターンがおおかつ再生産されて行くのかというと、やっぱり非常に疑問がありますね。

齋藤 その前の水田は基礎整備がされるほど条件がよかったですか。大川 淹の場合はそうだったようですね。しかし、大石田の方は非常に悪いですね。

齋藤 私が前に行った白鷹なんかですと、まったくの棚田で、基盤整備どころじゃなくて、移って来る時にはみんな植林したりなんかして、耕地としては放棄しているわけなんです。

大川 棚田かどうかは私もみていないんでわかりませんが、二反区画にちゃんと整備したっていうんですね。

齋藤 それは全部じゃなくて、条件のよいところだけでしょうね。

岩本 事実の確認じゃあないんですが、こうした集落の再編成っていうことを考えるとき、その大きな原因の一つとして、一寸時間的にさかのぼるかも知れないけれど、昭和三〇年代の前半頃までに強行された町村合併があるんじゃないですか。その時点で、地方財政の悪化が

あったということで合併が行なわれたわけですが、それまではそれぞれの町村がそれぞれ行政村として機能していたわけで、それぞれの集落もそれぞれの町村のなかでの位置づけを持っていたんですね。ところがそれぞれの行政村が合併した結果、新しくできた町村の中心に役場ができるようになり、地方における中央集権化ということが進み、その中心に置かれた行政村として面倒のみれる範囲はここまでという形で線を引き、そこから奥の集落の引きずりおこしをやったというのが結局、多くの集落再編成の実態っていうか、本質じゃあないんですかね。ここで町村合併がなかったらっていう議論は意味はないと思いますが、とにかく私は現在の集落再編成の発端はどうもそのあたりにあると思うんです。だから、この過疎地に対する切り捨て発想というか、そうした地帯を作り出すという考え方は、すでにその時点からあったとみるべきで、集落再編成というのはその結果としての現象と理解すべきなんです。しかも、こうした地方での中央集権化は、何も山村だけじゃあなく、大仙台市とか大山形市といった構想においてもそうなんです、最初は合併された旧町村役場が支所とか出張所として戸籍くらいは扱っていたのが、いつの間にか何にもやらなくなり、建物を公民館と名づけてお茶をにこしているようなことを私たちも経験しているわけです。私にいわせれば、町村合併というのは要するに住民サービスの低下をきたすことであり、それがある限度をこえると、集落再編成という形で人間の移植をしなくてはならないんです、その淵源は町村合併にあるわけで、しかも、それが昭和三〇年代の前半まで、地方財政の再建という錦の御旗のもとで強行されたということを想起してみることによって、その意図していたところがはっきりしてくるんじゃないでしょうか。

斎藤 集落再編成の根拠や背景、それから再編成された集落の持つ意味、

その現代資本主義のしくみとの関連、さらに大川さんから出された破壊と再編という場合、生活の主體的再編成といったものの萌芽らしきものは何かといった問題がいろいろあると思いますが、それはあとで議論することにして、ここで多々良さんの報告についての事実関係の確認をやっておこうと思います。多々良さんは、今月の御報告では現在の農村にみられる新しい動きといますか、宮城県鹿島台町の三つ屋における若者組、十和田市羽立地区のモデル・コミュニティーといったような事例をあげ、果してそれが主體的な集落再編成にあたるかどうかという問題提起がなされたわけです。そして、こうした問題に対するアプローチの仕方として、いわば農民の知恵といったようなものを重視する必要があるとうことを申されたわけですが、御報告頂いた内容の事実確認から始めたいと思います。

大川 私はこれまで全体的に基盤の崩れて行く過疎地帯とか出稼地帯ばかりみていますから、平場で基盤が比較的恵まれているところにおいて、今年の課題である主體的再編成という場合の、主體的な動きが実態としてあるのか、それともあるのではないかという期待なのか、その辺はどうなのかという興味があります。多々良さんの御報告はおうかがいしていて、議論としては大変面白いと思うんです。つまり、個人に分解されちゃったものが、家族という形でどうなるのかはわからないけれど、地域において一つの結びつきのようなものを作るということ、これはある意味では時代の流れに対する私の表現によれば抵抗の論理があるんだと思うんです。現代というのはむしろ資本主義の趨勢としては、共同とか結合とかいう論理を解体して行くんです。こうしたことが資本主義の本来の姿がなんですね。ずばりいっちゃえば一億二千万人を全部、個々分解することです。個々分解することが資本主義の論理からいえば、市場開拓につながるわけで、中央

集権的なコントロールのもとで政治的な意味を含めて支配しやすいうことになるとすね。資本の論理の貫徹ということになるわけですが、とにかく資本主義のエゴイズムっていうか利潤追求の論理を貫徹するには、まさにその方がいいんですよ。だからこそやって来たんです。そういう、いわば一つの歴史の必然みたいなものを、どういうふうに具体的に今度は再編するというか、できるといふのか、とにかく非常に厄介なことでしょうね。事実、今でもお祭りはあって、そういうところでは結合できるんですけども、そうしたもので、生産組織のなかで結合する基盤というものを具体的に持たないものっていうのは、結局、出るけれども潰れるということの繰り返しなんだろうって感じがするんですよ。だから、その出では潰れの繰り返しであるということを見つけないこともまた意味があると思うようにも思うんですが、多々良さんの御覧になって農村で、生産的な組織としての、たとえば協業の問題であるとか、そういう格好のもので、何かあそここのものは寿命が長いぞというような事例があったら、一寸御紹介願いたいんですが。

多々良 そうですね。たとえば生産組織が続いているという、宮崎あたりがそうですが、そこでは部落ぐるみの色彩が非常に強いですね。むしろ、そういった生産組織が出てきたことによって、今まで稀薄になりつつあった家どうしの協同が、互助というほどまでには行かないけど、それをきっかけにしながら、むしろ強まって来ているということがあるんですね。ただ、その強まって来たというのが、実は農業の条件にあるんじゃないかと、特殊な袖の生産というところにあるわけではなく、その袖の生産というのが、これからの日本資本主義の動きのなかで、今は願調ですけど、不利になるっていうか、そうじゃなくならないってことも出てくるとき、どうなって行くのかってことはあり

ますね。この袖生産っていうのは中小企業なんじゃないかと、ほんの家内工業っていうか副業的なものが一寸大きくなったという程度ですから、日本資本主義が駄目になって行くとなれば一番先にダメージがあるでしょうね。そうすると、その袖でもって結びつきが出来ていたものがまた解体して行くっていうか、さらに農民層分解をおこして行く可能性もあると思います。だから、そういった生産組織が出来て長続きして行くところもありましょうが、いろんな形が考えられるわけで、ある組織がこれからどういう動き方をしてくるかという条件によってかなり違って来るんじゃないでしょうか。長続きするという条件、ここでいうならば再編ですね、再編って言うことがどういふことなのか、私もよくわかりませんが、要するに住民による主体的な再編って言うことなんですが、その条件は一体どうなのか、あるいは崩れて行く条件は一体どうなのかというふうなことをもう少し整理してみようかと思っておりますけど、今のところどうもそこまではやっております。

斎藤 大川さんの御質問は、あるいは間違っているかも知れませんが、過疎地域なり何なりの場合における集落再編成に対して、比較的平場の恵まれた状況のなかでの主体的再編成というのは互助仲間あるいは若者組みたいなものが典型的な事例なのかということだったんじゃないでしょうか。

多々良 いえ別にそうしたものが典型的というつもりはありません。そういうことにはならないと思います。

斎藤 それならもっと別な形の再編成といったものが、そういった平均的な農村における農民の再編成として取りあげられるべき事例かと思えますが、私の感じとしては主体的再編成という場合にも、農民として再編成するのか、単なる住民として再編成するのか、あるいは、市

民として再編成するのか、といったことをしほらないと、何でもかんでも新しい地域づくりなり仲間づくりをすれば再編成ということになってしまつと、問題の本質がかくされてしまふんじゃないかと思ふんですね。

多々良 もちろん、私もそれはそうだと思いますね。

大川 大体、この主体的再編成っていう場合、何にとつて主体的ということをおうとしてるんでしょか。

岩本 どうもちつとも主体的じゃあないものまで、再編成の事例さえあればっていうのは困りもんですね。

斎藤 さきほど大川さんからも指摘がありました。生産基盤を基礎にして成り立つ共同組織みたいなものを、生産基盤を失なつたところの上にくつつけるのが果して可能かどうかといった問題ですね。ここで、いわば新しい主体的再編成といった場合にも、問題をそういつた農民、少なくとも農民らしきものの生産あるいは生活、昨年の東北での研究会のとき、生産活動を縮めたものが生活だといつた話が出ましたけれど、そうしたもの抜きにして、しかも農業らしきものを抜きにして、一般的に考えて住民生活あるいは市民生活といつたものを取りあげても、その主体的再編成といつたものがあまりにも広がりすぎてみりがないような気がするんですがね。

岩本 私は、この主体的再編成ということに決まつた事情を直接知つてゐるわけですが、前号の『研究通信』からもわかるように、積極的に主張されたのは山本陽三さんでした。つまり、山本さんには、今のままだは農村、農業というのはどうしようもない、このまま行つてしまつたら農業も終りだといふ危機感を強く持つたうえで、とにかく御自分の力で農村、農業を何とかしなければならぬといふ使命感があるように見受けられるんです。そうしたとき、従来の村研では、いわ

ば農村の民主化の推進という形で共同体の解体を肯定するというか積極的に評価するということだけをやつてきたけれども、しかし、その結果としての現在がどうであるのか、どうも共同体のあつた時代の方がなくなつた現在より農業、農民にとってはよかつたのではないかという気持が、山本さんには強いようですね。その場合、山本さんが共同体というものを、どのようなものとしてみてゐるかということに、まず問題があるし、はっきりいって私なんかそのとらえ方には非常に不満なんです。昨年の山本さんたちの村研での報告の事例でもわかるように、比較的山村のところにみられる部落あるいは集落を共同体としてとらえて、そういうものがとにかくそうしたところで資本主義の浸透に対する抵抗の主体になつてきたんだといふように把握してゐるんです。しかし、果してそういえるんですかね。むしろ、そうしたところまで、資本の手が及ばなかつたためにたまたま残つたもので、果して抵抗の主体であつたかどうかとも疑わしいと思ふんです。大川さんも報告のなかでいっていましたが、こうしたものがあそこに残つてゐる、ここに残つてゐるといふ事例を持ってきて並べて、だから抵抗の主体になつてゐるといわれても、どうもちつとも説得的じゃないんです。資本の手が直接及んできたような農村では、抵抗の主体にも何にもさつぱりそうしたもの残つてゐないんですからね。私がこういふいい方をするのはなぜかといへば、山本さんだけじゃなくて、最近はやりの共同体の復権とか再興とかいふことを主張する人たちのいふ共同体論をみると、共同体が本来持つてゐる生産組織あるいは労働組織としての性格をドロップさせて、ただ、もう何らかの共同があればそれを共同体と呼んでゐることに、大きな問題といふか欠陥があると思ふからなんです。そういう人たちのいふ共同体といふのは、家が集まつて集落があるといふ非常に単純な景観主義的な理解が

多いんですね。それで実態はどうかっていうと、そこで共同体の人たちが一緒にどじょうなべを食っているんだという形でのつながりがあるということ、それが相互依存的組織なんだから、それを生産組織やなんかを利用して行くことによって、これからの主体的再編成の核になって行くんじゃないかなろうかという希望的観測にしかすぎないんですね。だから、そういう人たちだって、たとえばそうしたどじょうなべを食べるといったつながりが、主体的再編成の現実の核になっているというんじゃないかって、現在の農村における集団のゾルレンとして、彼らのいう主体的再編成の中心にすえて行こうという、いわば非常にポリテイカルな主張なんだと思うんです。だから具体的な分析というよりも、どうも政策志向的な性格が非常に強く出ているところに、主体的再編成というテーマの決め方の特色があったんじゃないかと思えます。そうすると主体的再編成という場合もイエとかムラとか、しかもそれがややもすると生産組織をドロップさせたような形で考えられたイエとかムラとかいったものをふまえて、それを核として再編成するということが政策的に可能であろうというところで考えられたのが、今度のテーマだと私は理解しているんです。まあ、ムラのなかをみれば、何らかの形でイエのつながりがあるから、それを逆に生産組織に使えるだろうという気持があると思うんですが、むしろ、なぜムラのなかでのイエのつながりが生産組織以外のところにしか残っていないかといった理由とか、なぜ生産組織でのつながりがなくなってしまうのかということについての視角というものが、そこにはまったくないんじゃないかと思うんです。だから共同体というものを非常にというか、ただひたすら美化して、とにかくそれが回復できればどうにかなるという安易さに、イデオロギー的な危険の問題があるように私には思えてならないんです。

多々良 私も主体的再編成といういい方にはいろんな疑問もあるわけで、私の考える主体的ということもまったく今まで指摘された意味においてであって、たとえばいま私が並べた事例も、決してとくに主体的な事例ではないんですね。ただ、そうしたなかでも新しい動きといえるのは、もちろん、これも行政主導型なんですが、今まではこうしたものに乗せられてきただけなんです。それが今度はそれを利用してという一つの志向が出て来ているんで、その点、昭和三〇年代とは違った一つの動きとしてとらえられるのではなからうかっていう気がするんです。そのなかで本場に農民の主体的な対応としての再編のしかたといったものが、もしあるとすれば、一体その条件は何なのかという意味で私は考えているんで、今、出て来ている動きが主体的な再編の動きであるとは決して思っていないんです。ただ、昭和三〇年代にみられなかった動きが情勢として出て来ていることをおさえてみたかったんです。しかも、そうしたことが非常に平均的な農村で出て来ていることは注目していいと思うんです。昭和三〇年代ですと、そうしたことがあっても非常に特殊な条件のところではかみられなかったと思うんですが、これは一寸あいまいな形ですけど、平均的な農村でそうした動きが出て来ているということに意味があると思うんです。そういうったところで、とにかく農民の生活の知恵といいますが、依頼といったものをふまえた選択による新しい動きのあることに注目しているんです。

菅野 何かどうも、その新しい動きっていうの、本場に新しいのかっていう気がしますね。むしろ、どうも古いものっていうか、後向きの、少くとも前向きじゃあないって印象ですけど。どうも行政を利用するっていうんだけれど、利用しているように見えながら、結果はやはり利用されてしまうっていうことになるんじゃないですか。

岩本 結局、新しいといながら、後向きにしかみえないというあたり

に、再編成というのが革命といったことと基本的に違ふところじゃないでしょうか。主体的といつても、それは体制の許容する限りではやれるかも知れないけど、もし本当に主体的になったら資本主義に潰されてしまうでしょうね。それとも一つ、私は主体的再編成というテーマについてだけれども、どうしてわれわれ研究者がその政策志向をしなければならぬのかわからないですね。いま、農村でみられるいろんな動きを事実として調べて、その意味を解明するのはいいですよ。しかし、そこからなぜすぐお役に立つことを考えなくちゃあならないのか、私にはわかりませんね、大体、せいぜいテーマが決って一年ぐらゐの研究ですぐ政策志向するなんてことはできるはずないですよ。われわれにとつてせいぜい出来るのは、事実の提示とその解釈であつて、それを政策にどのように役立てるかっていうことは、農民なり当事者に委ねればいいんじゃないでしょうか。私は経済学の任務は、たとえそれが経済政策であつたとしても、そこまでだと思ひますがね。経済学によらず社会科学なんつていうのは、そういうもんじゃないんでしょね。政策なんつていうのは、そもそもそれをやる人間の世界観がからんでくるもので、学問の次元を超えたところで行なわれるものだと、私なんか考えていますから。

佐藤 そこで経済学の方にお聞きしたいんですが、よく資本の論理についてということがいわれるけど、農民とか農村に対する資本の要求っていうのは、何なんですか。

岩本 こういふ答え方すると、公式的だとか、木で鼻をくくつたような返事だつていわれそうだけど、要するに労働力の供給と食糧の供給ですわね。

斎藤 それと製品に対する市場としての期待も資本は農村に対して持つ

んじゃないですか。

大川 それは資本主義社会っていうか、商品経済の社会なんだから当然でしょうが、高度成長期には、資本は農村や農民に対して単に労働力の供給を求めるといふだけでなく、その労働市場そのものの拡大を農民に対して課したんじゃないですか、たとえば脱農の促進という形もそうだけど、出稼ぎといった形でいいから、この出稼ぎに行くっていうことが多くの農村で恒常化したんだけど、秋田の農村において出稼ぎに行かないでおこうっていう動きが出て来たんですね。これなんか、一つ資本に対する抵抗の論理を示すものとして評価できると思つてゐるんです。しかし、商品社会ではなかなか、それを続けるのは難しいかも知れませんね。そこにはいろんな情報がある、それこそテレビなんかで入ってくるから。この点、私が二度ばかりみてきた中国の人民公社の農民とは違います。そこでは商品として購入されるものも少ないけど、大体テレビなんかで情報が入ってくることもありませんがね。日本の農民なんつていつたつて、自分達のレベルとほとんど変わらんだらうというような質問をするような程度の情報しかないんですから。

岩本 ここで中国の非商品社会的な状況つていうものが一寸出たんですが、最近、中国だけでなく、たとえばインドあたりをやつてゐる人のなかでも、この非商品社会のあり方に注目する考えがあるようで、そうしたところにみられる共同体に大変な感心を示し、これこそ高度成長の破綻した現代に対する救世主だといったような持ち上げ方をしているんですね。中村尚司さんが最近の『国家論研究』第一二号に載せた「共同体と近代国家」なかで、私の共同体についての考え方を「素朴な発展段階論」にもとづくものという大変私にいわせれば的外れな批判をしているんですが、それでは彼のいう共同体は何かといへば、

「二人以上の人間によって構成される性的な共同体や家族共同体から、全人類を包含するホモ・サピエンス共同体までの範囲で無数に存在する」という粗雑なもので、ECはおろか「宇宙船地球号」まで含むという代物で、こうした共同体によって近代国家の解体をめざさそうというものなんですね。「宇宙船地球号」が共同体なんということ聞くと、「人類みな兄弟」なんていっている例の笹川良一のコーンシャルとの共通性を感じられて何ともいぬ無気味さがありますね。こうしたイデオロギー的な底流っていうものにはもつと神経質になるべきだと思います。それと彼の場合、「非市場的な交換システム」を「共同体主義復権の第一歩」だとしているわけですが、これは要するに地域主義者なんかのかなりの部分が持ってまわっているポラニー理論と同じなんでしょうね。このポラニーのいう非商品社会っていうのか、非市場社会っていうのが低成長段階に急に持てはやされるようになってきたのは、ちょうど高度成長期に考え方はまったく対照的なんだけれどもロストウ理論が流行したのと似ていて面白いですね。しかし、こうした考え方をする人たちが共同体の歴史的意味も考えずに、人類の危機だなんてことで、脅迫して、われわれを共同体の束縛のなかに引きずりこもうとしているのを知ると、とても面白がってはおれませんね。

大川 こういう議論が出てくるとなると、大会での共同討論は、どういう展開というか、つめが行なわれるでしょうかね。まあ、こうした研究会を何回も重ねて行くうちに、つまってくるんでしょうが、それぞれがそれぞれの発想でやってしまうと收拾がつかなくなり、学会としての蓄積がなくなってしまうって気がするんですね。まあ、しばらくの間、それを繰り返す以外ないのかも知れませんが、何かもう一寸つめておかないともう具合が悪いんじゃないかと思えますね。

嶋田 多々良さんの報告と関連するんですが、再編成という場合、どう

も古い形態が要するに復活して来るんじゃないかという認識があったんですけれど、この主体的再編成ということがその語義通り行けば、かなり古い形態をよみがえらせて行くというような形でなされても、それがどのような方向で行くかということを決める場合、あるいは方向づけというか、概念をきちんとする場合、先ほどからもいわれていたように、何が一体後向きでなく、前向きなのかということになると思うんですね。再編成は結局、資本主義の枠のなかでなされたものであって、あっさりいえばもう革命とは違うんだということになるんじゃないかな。

岩本 ただ、現状では革命やった方の困が少くとも農業の問題に關してうまくいっていないということも、後向きの再編成をあたかも前向きのような意味を持たせて提示されてくる理由になっているんじゃないかと思うんです。今の、たとえばソビエトとか中国なんかの農業のあり方をみていると、やっぱりとてもあれでは結局駄目なんじゃないかということも出て来るんじゃないですか。たしかに今は社会主義にあって何ていうか非常にづらい時期にあると思うんですよ。先行パターンがあまりにも悪いだけにですね。まあ少くともいいところを見せることが出来ないんですからね。とにかく資本主義の農業とは違うんだ、絶対にいいんだというところを出せないでいるんですからね。

斎藤 大川さんが中国で人民公社をみてきた感じはどうですか。
大川 私もあんまりよく知ってないんですよ。ただ見てない人よりは見えますからね。その点は強味だと思ってますが、私はやっぱりソビエトとは違うという感じはしています。ソビエトもそのうち機会があったらのぞいてみたいと思ってますがね。やっぱり主産地形成論でしようソビエトの方は。それから農工一体化論といっても、コンビナート・システムですね。そういう意味での編成のしかたというのは、かなり

資本主義的なやり方だったんじゃないですか。その点、中国の特色と
いうのは、農工一体論というのをかなり大事にしてやって行こうとし
たところにあると思います。たとえば機械化なんていうのも、ある地
域の、それは別に具体的なパターンがあるわけじゃないんですけど、
自然的条件とか、いろんな条件を生かして県なら県のなかで出来るだ
けの自給体制をとらせるといふやり方です。だからソビエトのように
ウクライナで小麦を作って、また別なところで鉄を作るという形のや
り方ではなくて、生産性があるところがあがるまいが、ともかくある地
域のなかで基本的に農工一体化論をとらせて行くという、いわば地域
内自給体制という格好ですね。それを基盤にして基本的にないものを
移そうじゃないかということなんです。だから行ってみて非常にわか
るのには、それはある意味ではあたりまえのことなんです。第三次
産業というのがスポットと抜けてないことなんです。そういうしくみ
があって、その基盤の中核として人民公社があるわけですよ。そして、
人民公社みずからが農業だけやるわけじゃあなくて、火薬も作ればセ
メントも作ればみんな作るわけです。それでそのなかで山なら山に合
う農業機械工場を作っちゃうわけです。だから日本なんかのように一
律のものを作って、逆にいえば山でも何でも基盤を機械に合わせて整
備しなくちゃならないわけでしょう。そういう格好じゃないんですね。
山に合わせた形の機械を作っちゃうわけです。だから、そういういた
るところってというのは、やはり基本的に違っていて感じがしますね。ただ、
生産性がまだ低いですから、それがあがって行く過程のなかで、ある
いはまた情報みたいなものがどんどん流されるようになって来ると、
中国社会が今後どのように変化して行くかっていうのは、まったくわ
かんないですね。それこそ解体するかも知れませんが、社会主義社
会の解体と再編みたいなものもあるかも知れませんが、それはまだわ

からないです。面白いとは思いますがね。
菅野 かつて合作社がずっと広げて行ったものを、また少し縮めたとい
う形ですか。

大川 えー、その試行錯誤のなかで、それを作り出して行ったんで、今
のところ、ある程度それは安定的なようですね。生産力が発展したり、
たとえば機械化が急速に進むという過程で、おそらく生産力に対応し
た形での土地の基盤整備とかいろんな問題が出てくると思いますね。
逆にいえば政策的に機械化させないんですよ。少しずつ少しずつし
させないんです。

岩本 だからアウタルキー、まあ地域アウタルキーなら地域アウタルキ
ーに徹しうれば、それは可能だと思えますがね。それが一たん商品
化を高度に遂げた社会において、その逆行というのは可能かどうか
て問題がありますね。玉野井芳郎さんなんかは、過去に関してポラニ
ーを、それから未来社会に関しては中国の事例というのを出して来て、
非商品社会のようなものの構築を考えているようですね。

大川 あれは怪しいんだな、いろいろみてるよ。

鹿子木 大川さんがいわれた農民の抵抗の論理としての認識があれば、
主体的再編成というのは意味があるということなんです。認識があ
れば意味があるというのにはわかりますけれど、その意味というのはど
ういう認識があるということなのかよくわからなかったですね。そし
て、意味があるとしても、それがどれだけ生き残れるかは疑問である
といわれましたけれども、その抵抗の論理としての認識の内容が農民
の眼からみて一体いかなる論理として映って行くのかということがや
っぱりぼやっとしてますね。

大川 これはぼやっとせざるをえないんですね。非常に難しいんです。
それはつまり分析者の立場でみる場合でも、ある事象を多々良さんの

ように主体的再編成としてみるか、あるいは私のようにせいぜい抵抗のパターンにすぎないのであって、しかも滞空時間の非常に短いものとしてみるかの違いもあるわけなんですから。

鹿子木 そうすると、一寸した儲けというか、事後出費をおさえて行政を利用してたとえば住宅を手に入れるとかいう意味での抵抗といった次元のものなんでしょうか。

大川 そういうことも一つにはあると思いますよ。だから、さっきからいろいろ議論が出ているけれど、よく肉を切らせて骨を切るということがいわれますが、どうも肉を切らせて皮を切るぐらいの結果しかなくていないという感じが、私にはしてゐるんです。だけど農民自身が今のような状況のなかでは、農民として解体され、プロレタリア化して行くだけなんだということに耐えられないという意識を、そういう動きのなかで持ったとすれば、それはそれなりに意味のある一つの運動あるいは運動体、一つの組織体なんじゃないのかと私はみてゐるんです。だけど、それがやはりそんなに蔓延するほど、資本主義っていうのは甘くないんですね。まあ、主体的にっていうのは、いわば反資本主義の論理だと思ふんですね。主体的っていう場合、それ以外に本当に前向きな論理っていうのはあるんですかね。私には基本的な疑問なんです。だから、経済学をやっている者は、前向きな話っていうのは抽象的にしか思っていないものだから、なかなかいえないんですね。だから、もしわれわれが何かいって、農民がそのことによつて動いても、結局、また新たな形で資本によつて再編されてしまうだけのことではないかっていう意識が、私なんか常に働くわけですね。そうなる、なかなか政策的なこといえないですよ。その辺に何か先ほど来、固執しているように思われるのかも知れませんが、主体的というとき、一体誰にとつて主体的なんだということを繰り返していつている理由

があるんです。

安孫子 大川さんのいう、その意識的な抵抗の論理という場合、秋田の出稼ぎに行かないでおうとうとしている人たちの動きを取り上げられたんですが、それは三里塚の空港をめぐつての反対の動きなんかと同じことなんですか。あの場合なんかですと、はっきり表に出ているんですね。

大川 そうですね、三里塚の人たちと秋田の出稼ぎに行かないでおうとうという人たちとは、資本主義というものに対する認識みたいなもの、ズバリいえばイデオロディカルなとらえ方といったものに違いみたいなものがある、私には思えるんです。

安孫子 そういった自覚されたものがあれば、何がしかの意味があるっていう評価をした場合、単なる自覚っていう点で評価することはできないんじゃないかしら。

大川 私が評価っていうのは、それがいいとか、それをやるべきだっていうことであつてゐるんじゃないんです。

安孫子 いや、大川さんが何らかの意味があるっていうからいうんですよ。

大川 それはたしかに難しいことですね。

安孫子 私はやっぱり具体的な意味が出てくるのは、それが生産力なり経営なりに何らかの形で結びついて来るか来ないかというあたりにあると思うんですね。農業に関していえばですね。農民運動一般だつたら三里塚だつて別に意味がないということにはならないわけですね。しかし、農業ということに関していうならば、おそらくそれは生産力なり経営なりに結びついて来ないといけないし、その時の結びつき方っていうのが、たとえば出稼ぎに行かないっていうこといえば、水稲単作をやめなければ駄目だつていう形でくつつくわけですね。そう

すると、たとえばその結果として出て来るところの複合経営みたいなものの生産力というものが一体、現在の資本の進めている農業政策の方向からみてどうなるのかという問題がはじめて出てくるという気がするわけですね。

大川 その点では私は高畠の有機農法研究会というのが一寸面白いと思っているんです。あそこもやはり出発点は出稼ぎに行かないでやる方法を考えようじゃないかということから始まっているんですね。だから、それから行くと、今、安孫子さんもいわれたように複合経営やらなくちゃならないということになるんですが、しかし、複合経営ということになると、米は価格が保証されているけれども、ほかのものは駄目で不安定だということに気づくんですね。それで、なぜ不安定なんだと、何でそうなっているんだという形で、現実の農業政策、

あるいは資本のとする農業政策に対して具体的に抵抗して行くというか闘うというか、とにかく対応して行くという格好で、農民の意識のなかに入りこんで行くんで、私はあれはそれなりに非常に意味のある動き方じゃないかという点で評価しているんですがね。そこでは彼ら自身は、複合経営をやることで、たとえば米の反収が二俵減るといふことを知っているわけで、知っていてなおかつそれを埋めるためにどうするかということ、所沢の消費者グループとコンタクトをとって、そこに有機農法でとれた米を持って行って二俵分減った分をちゃんと上乘せした価格で買って賣っているんです。つまり、有機農法の、化学肥料や農薬を使っていないという安全度を価格化しているわけですね。これはね、しかし、また問題がそこから出て来るわけですね。

安孫子 それは大問題ですよ。そうしたものをだまされて買う消費者がいるから成り立つわけですよ。それ以外の意味はほとんどないといっ

ていいんじゃないですか。それは多少費用化してもいいということになるのかも知れないけれど、基本的には自分の懐勘定があればいいというんで、ひとまわりまわってくと大変資本主義的な発想なんです。反収がさがっても、その分だけ高く売ればいいってわけですからね。たしかに無肥料無農薬のものを高くてもいいから買おうっていう人がいますからね。農民全部がそれをやったら大変で、貧乏人はそんな高いもの買えないですからね。

大川 たしかに金持だけが食えるっていう格好ですよ。

岩本 高畠の場合には一寸みると、こう大変世をすねた論理のように見えるんだけど、結局、どうもその方が営業できるんだということの認識がそこにあるんですね。こういうことやっているとということでもって、ジャーナリストやマスコミが非常に持ち上げてくれますから、そのことでもって商売できるという打算もあるわけですよ。もちろん非常に真剣にはじめたことであることは間違いないんですが、それは非常に農民的なエゴイズムにもとづく発想なんです。ただ、もし高畠でもって意味があるとすれば、いま生産性をおとすことで、将来に対する地力保全が可能なんだということが出て来たというか、少くとも周囲にも気づかれてきたという点だと思います。

安孫子 そういう点で私はさっき生産力に結びついた場合といたんだけど、たとえば山本さんがいっているような生態系の循環をこわさないようにということだけど、これは農業だけじゃなくて、人間の生活自体が生態系の循環がこわれたら成り立たないわけなんです。ただ、それを現在の生産力水準のもとで、どういう形で具体化するかというあたりを反省するかしらないかはその問題ですね。しかし、私はそれを有機農法だとか自然農法だとかという形で、わざわざ、わざわざというのには有害なものは、これはもちろん排除しなければいけない

んだけど、わざわざ生産力水準を不必要に下げたものを、それが本来の農業経営のあり方だとか、原型だとか、理想型だとかというようにやっちゃうと、やっぱり進歩ということは出て来ないですね。

大川 私もそうは考えていないですよ。

安孫子 そのところで一体どのような生産力の向上を考えるかっていうことが必要ですね。

斎藤 有機農法っていうか、そういうものやっている人自身、ゲリラ戦法と称しているのがありますね。

安孫子 そう、ゲリラなんです、たしかにそういうのは。

岩本 安孫子さんも『村落社会研究』第一二集で書いておられるわけだけど、結局山本さんのような考え方をすると、われわれのような考え方をするとの違いというのは、資本主義というものを人類史のなかでどう位置づけるかっていうことから来る世界観の違いに起因してるんじゃないかと思うんですね。つまり、資本主義っていうものが人類の発展にとって必ず経過しなければならぬ段階だというところをえ方をすると、いや資本主義になってしまったことが間違いだっただというところをえ方と、そこらあたりの認識の違いにあるんじゃないでしょうか。

安孫子 最後はそこに行くだろうという気がしますね。

岩本 ただ、資本主義を発展段階の一つとしてみることに否定的な人自身が資本主義社会のなかで生まれて来ていることの面白さを感じますね。

安孫子 資本主義社会に生まれたから、そういうことがいえるんで、封建社会に生まれていたら、資本主義になりたいと思うんじゃないでしょうか。

岩本 いや、資本主義社会において共同体社会への回帰を望むという論

法で行くと、奴隷制への回帰を望むっていうことになるんじゃないですか。

菅野 共同体っていうようなことも、結局は資本主義が共同体を食いつぶして行くっていうか、共同体をぶっこわすことによってしか、資本主義が成り立たないという観点のなかで共同体をとらえるのか、それとも資本主義との対立関係なりなんなりを全然度外視して、共同体を非歴史的にとらえるかによって雲泥の違いになってくるわけですね。

安孫子 そうでしょう。共同体というのは、その本来持っていた人格的關係の重みというものを全然感じない人が気楽に共同体はよかったですか、いいとかいうわけです。自分がそのなかに入って押しつぶされていたら、とてもいいなんていう考えは出て来ないんじゃないですか。

岩本 私は半分冗談でいったことがあるんですけど、ムラに生まれ育って大学まで行った人っていうのは、例外もあるかも知れんが大体ムラのいい階層の出なんだと、そういう人たちっていうのは、あるいはイエのしがらみは感じているかも知れないけれど、ムラの重味っていうのは案外感じないで過ごして来ているわけで、というのは、その階層はムラの重味になっていて重石の上の部分だから重味がかからんわけで、大学出てムラに帰れば故郷に錦を飾るといふことになるんだから、ムラはいいもんだということになるんですよ。婦去来情緒なんっていうのは、まさにそれだと思ふんですが、私みたいなね、東京で生まれて戦争中疎開してムラに入りこんだ人間というのにはね、とてもじゃないけど、ムラなんていうのは、そんな生やさしいものじゃないということを骨身にしみて感じているんですね。もう亡くなりましたけど、部落主義者さだみのの書いたもの面白いですね。彼は部落イコール共同体とみて、部落の四戒を国法に優先するという観点から肯定しているわけですが、もちろんその四戒も生産組織とのかわりも何も

ないもんで部落が共同体ではすでないこの証明に逆になっているんですけど、とにかく、その彼でさえ最近の部落復活論者や共同体復権論者に対したら、「俺の書いた部落の事実を読んだ上で、お前それでも我儘できるのか」っていい出すんじゃないでしょうか。その意味では、私はそうした人たちに今こそ、きだみのるは読まれてしかるべきじゃないでしょうか。部落には、彼の指摘する四戒があって、彼はそれを承認しながら、部落で生きて行こうとしたわけですよ。そして、そこから進歩的文化人をあざ笑っていたわけですが、その彼も最終的には部落からはじき出されてしましますね。その結果が昨年の直木賞受賞の三好京三の『子育て』のモデルということになるんですが、まあ共同体復権論者たちは、共同体とは、部落とは、それが生産組織でなくなつた段階の、もはや共同体とは呼べないものになって、個人に対する規制を持ち続けるんだということを知つた上で、それにどう対処するのか、つまり是認するのかどうかを明らかにすべきだと思いますね。自分は別で、農民だけは農業続けるために、その束縛のもとに入れというんでは駄目ですね。しかし、ムラの重みのわからん人には、あるいはこういう設問の意味すらわからんかも知れませんね。

大川 山本さんの場合、といっても、私は山本さんが全体的にどのようにお考えになっているのかわかんないんだけど、資本主義の枠組というものをどのようにとらえているのか、あるいはどの程度に意識されているのか、問題があると思いますね。もし、枠組というものを意識したなかで、モデル云々ということで、こうした発想をしているとすれば、せいぜい現実的にはありえないチャヤノフ流の小農経済論に落ち着くのが関の山じゃないかと思つていてるんですけれどね。

菅野 村落生活の生活の方はどうなるんでしょうかね。ただ、それは共通の認識として、特別の新しいものでも何でもなくて、農家の生活な

り、村落の生活という場合にはね、生産生活以外の生活というか、消費を中心にした、それが未分化というか複合というか、とにかく統合されたものを一つの農民生活として、そういうものが今日どう変わっているのか、どう破壊されておるのか、ということの起点にすえて考えなくちゃならないという気がしますね。

斎藤 だから、その方向として、いわばその完全にプロレタリア化して行くという形だけでとらえ、そして、農民でなくなるのが必然であるという次元でとらえるのか、あるいは、菅野さんがいったように、いぜんとして農民が農業生産に結びついて、生産力の向上を推進するよな形での再編成ということが行なわれているという形に焦点をしばつて考えて行くかによって、取り上げる問題領域が違つて来ると思ふんですね。

菅野 えー、違つて来るとは思ふんですけれどもね。ただ、このような生産と生活、消費といったものが完全に未分化な、もちろん完全に未分化なということは、もう明治以来ないだろうけれど、まあ未分化的なものが、こういう風に変つて来て、プロレタリアートになつて行くつていう場合だつてありうるわけですね。

斎藤 そういったものは、たとえば、いわゆる過疎地域では典型的に、ガンツリッヒにつかまえることができるわけなんです。

菅野 だから、農民生活という場合の生活というものを、社会学でいう生活構造論みたいな形でつかまえて行くのが有効なのか、もう少し素朴つていうか、村研でこれまで考えて来たような発想、つまり生活から生産をとばらつたものを生活というという、あの人間の生活全体のなかの生産の部分をとばらつたものを生活という形でとらえたんではまずいわけでしょう。

斎藤 まずいんだけれども、しかし、その農業生産から完全に切り離さ

れてしまうものが非常にあるわけでしょう、一方において。

菅野 そうです。一つの極としてあるわけです。

斎藤 その辺で。

菅野 一つの極としてあるわけですがね。

斎藤 それが一つの大きな基本的な流れとしてあるわけですよ。そして、

あと、そうした流れのなかで、なおかつ、その農業生産の担い手として再編成しようとして、あるいは生産力をあげるといふ形での対応の流れが対極にあるわけですね。

大川 まあ、高度成長期と、今後、日本経済が国際状況の変化のなかで第三次高度成長期なんていうのがありうるのかどうかわかりませんが、低成長時代になった今日の状況をくらべてみると、高度成長期ではプロレタリア化して行く側面が非常に強くて、その側面に焦点を合わせて分析して行けばよかったですと思うんですね。この間、一〇〇万戸が減って、六〇〇万ぐらいの人が兼業化して行くことで、労働者化のプロセスが進んだわけです。ところが、最近では、その傾向は進みながらも、やや停滞してきだしているわけです。しかし、そうした日本の農民をみると、専業農家だけが農家という問題が出てくるわけです。だから、兼業農家というものを、どういう形で農家として位置づけて行くのかということがあるんですね。それには客観的にとらまえる場合と、彼らが主体的に意識する場合の二つがありますけどね。そういう点を頭においてみると、資本主義というのは、やはり停滞ムードになってくれば、プロレタリア化を促進するというより、むしろ兼業という形どまりにさせて行くんじゃないかと思うんですね。そうしたことが常態化して行くと思うんで、その常態化して行く部分をですね、どのような格好でとらえて行くのかということが、おそらく課題になるんじゃないでしょうか。だからプロレタリア化して行く側

面だけでとらえたんでは、一寸、今後の動きは、それはもう結論がトレンドとして出ているんじゃないかっていうだけでは、なかなか説明できないっていう感じがあたりしますね。

菅野 その辺に佐藤さんが先に資本主義の論理っていうものは、どのようなものとして現われてくるのかということも尋ねたことの中味があるんじゃないのかな。資本主義というものは、個人を完全に個別化して市場のなかにつきこんじゃって利潤を追求するっていうのは当然のことなんですけど、それがあつた一定の限界のもとでは何ほどが個人化されたものを集団化してつかまえるっていうようなことが出てくるんですね。たとえば低成長の段階になってくると、いつでもコミュニティ論とか、村落再編成とかいったことが必ず出てくるっていう形なんです。それが丁度、高度成長期にみんなプロレタリア化が進んでいるもんだから、失業が出てくる、あるいは出稼ぎがいらなくなってくるのかという時点で出てくるんですね。それはどうも資本主義のどの段階にでもみられるような気がするんですね。明治からずっと、この村落をみてくると、いつも再編成が行なわれているんですね。その場合、農民の主体的な動きっていうのがある程度あると、再編成する力がそいつの三倍位の大きさでかかって来るんで、主体的な農民の動きっていうのは、いかにも主体的なみにたいに持ち上げられながら、実際は体制の意のままに再編されて来ているというのが歴史的経過なんではないでしょうか。まあ、その歴史的経過を、今のこの高度成長期のもとにストレートに持つてくるのはどうかと思うけれども、少なくともそういう基本的な動きはありますね。

岩本 確かに自由民権運動のあとに市町村制が出てくるし、産業革命のあとに地方改良運動っていうのが起こってくるし、大正デモクラシーのあとに国民精神興運動、昭和恐慌をはさんで小作争議が高揚するな

かで農村更生運動が組織されてくるなど、みんな上からの再編ですよね。第二次世界大戦後だって、まあ一応、地方自治法みたいのが出てくるけど、その本来の立法精神に従うというよりも、私がさきにいっただように地方財政が悪くなってきたということを理由にして、しゃにむに市町村の大合併をやってるわけですね。そして、いままた何かこう再編成やろうとしている動きがあるんですが、どうもそのような指令を出した方向ってのははっきりしてますよね。それを主体的に利用できるって考えるのは、かなり甘いんじゃないでしょうか。

菅野 だから、私は農民生活なり村落生活というものを考えるっていうとき、やっぱりよくいわれる複眼的っていうんじゃないけれどもね、農民の主体的な側、これはどうしてもみないわけですが、それと同時に、それと対立しながら、しかし対立したようにみせかけないでも実際は対立している体制の側、資本主義の側の農民の掌握あるいは農民生活に対する掌握しかなんかもの接点のところをみて行かないと、主体的再編成、それはいいんですよ、主体的再編成はいんだけど、それだけではどうも見きれないものというのが今の資本主義体制のもとにおける農民生活の本質なんじゃないかなっていう気がするんですね。そんなことあたりまえだといってしまえば、きわめてあたりまえなんじゃないかな。

安孫子 ことばだけの問題ですと、たとえば、それこそ、ふるさと作りから始まってね、上からもやってくるわけです。あれだって、実は別に県が本当に面倒をみてやるっていうわけではなくて、農民にそのような意識を持たせようってことで、県民をおだてながらやらせるわけだから、主体的再編成といえないことじゃないわけですがね。だから、こちら側で主体的再編成ということを考えて、今までのやり方は間違っていたんだと深刻な反省、自己批判しながら、みんなて何かやら

くちやいかんということによって、うまく行かなかった場合、やはり自分の勢力が足りなかったんだというようなことになってしまい、敵がどこに行ってしまったわからなくなってしまうんじゃないですかね。そういう状況っていうの、今、非常にはっきりしつつあるんですね。とくに、ふるさと運動に代表されるような、向うの側が農業見直しだとか、村の見直しだとかやっていると、あえてそれに重ねて、こちらも村の主体的再編成ということをやるとき、どこが連うのかっていうことをあいまいまままでやれば、最後に敵を見失って、われわれの力が足りなかったとか、自分の考えはよかったが他の奴がよくなかったんだとかいうようなことになりはしないかって気がするんですね。

菅野 利用するつもりが利用されたりしてね。

岩本 結局、権力を持たない人間が再編成っていうこと自体、ナンセンスだっていうことにもなっちゃうんですね。

安孫子 そういう意味でやっぱり今のままで駄目だということがわかるならわかるとしたら、もっとはっきりした方向づけなり、どこが批判すべきものだったということなんかを明確にした上でやらないといけないし、かつての資本主義の危機っていうか、非常に資本主義にとって困ったような状況になった時期である明治末とか昭和のはじめとか、おそらく放っておけば政治的危機が猛烈に出てくる段階に、全部この農村の再編運動っていうのが出てくるわけなんです、やっぱり、そういう危機回避なんだということや考えないわけには行かないし、そこで一括されてそういう方向をとって来ることによって一体何になるのかという点は、どうも本腰を入れて見なければならぬことですよ。

大川 どうも、そのあたり、具体的なものが欠けてますからね。

岩本 結局、今、あせったような形で主体的再編成を考えようとしている人たちの気持のなかには、人類の危機とか民族の危機とかいうよう

な発想があると思うんですよ。そこには、やっぱり階段的な視点の欠除しているのが案外大きい問題だと、私は思うんです。階級的な視点からの反資本主義と民族的な視点からの反資本主義っていうとき、私はどうもこの民族的なものっていうのは、まかり間違えば非常に恐いと思うんです。どうもそういうことに、何かもつと神経質にならなければならぬ時期に来てしまっているという気がしますね。何かどうも今そんな鬱屈感が感じられるなかで、今年の村研のテーマっていうのは、場合によっては科学から空想への道を歩むっていうようにみえるんですよ。

安孫子 もう少しいえば、ファシズムだって資本主義を批判したわけですからね。そういうことにはなりはせんといわれるかも知れないけれど、ならんだろうというのは一つの期待にすぎないんでね。本当ですね、そのことは。まあ、この点、農業経済学の方でみると、大体七、八年ぐらい前じゃないかな、こういう議論が出はじめたのは、守田志郎さんが「小さな部落」なんかを出して来たときには、その形をととのえて来たんで、やっとそうした風潮が村研にも入って来たのかなっていう感じがあるですけどね。だから、そういうなかで、一方では自然農法に代表されるような考え方、もう一方ではこういった共同体論の見直しといった考え方があって、そうしたものを向うは向うなりに生産力と社会組織につなげるし、われわれもそれをつなげて行こうと考えるんですけど、そのトータルな方向が一体どっちへ行くかっていうことだけは、はっきりやっておかないといかんという気がするんですよ。

大川 私もやはりそのところをちゃんとしておかないで、このまま行ってしまうと、さっきも話に出たように非常に短絡的な政策志向論理になっちゃうんじゃないですか。

菅野 主体的再編成っていうのは、テーマとして、それはそれでいいですからね、最少限度、今の歴史的特質みたいなこと、つまり高度成長がジリ貧になって低成長になっている現実のなかで、それがどのような意味を持つのかっていうこと、歴史的位置づけと、主体的再編成というものが大きな道筋として体制の側にどうかかわりを持つのかということをおさえて、あるいはおさえるべく努力しないと、本当に瑣末なところをつかまえて、大きなところを逃がしてしまうという困ったことになるんじゃないですかね。

岩本 そうですね。こんなムラが残っているんだといっても、資本が相手にしなかったため偶々残ったにすぎないものが、抵抗の姿勢を示した事例なんだということなっちゃったりするおそれがありますね。

安孫子 この主体的再編成っていうサブ・タイトルがついたのは、何かこの農村の立ち直りの方向みたいなものを考えようというわけなんじゃないかな。

大川 前号の「研究通信」の議論でみると、少くとも山本さんはそうですね。

岩本 山本さんがそうだし、長谷川宏二さんがそうですね。ともかく、今や農村・農業・農民は客観的にみておれる状態じゃなくて、農村が駄目になったら一体どうなるんだっていう危機意識があるんですね。大川 「地域主義」研究集談会なんかの動向も新聞でみる限り、どうもそうですね。

岩本 地域主義ということに関して、私は「経済セミナー」の二月号で問題点を指摘したところ、杉岡頼夫さんが五月号で反論してきました。それで私はまた六月号で問題点の再指摘をやったんですが、驚いたことに、この地域主義っていうのが変な形で蔓延しはじめて、経済学者のなかでも、そうそうたる人たちが新しい経済学を求めると称して、

従来の立場を放棄して、そっちになびいて行ってるんですね。経済学の危機なんて称してですね。しかし、実は、それは現体制の危機ではあっても、経済学の危機でも何でもありませんね。それがいかにも経済学の危機のように大騒ぎしているのは、結局のところ、近経・マル経を問わず安易に政策に加担したような人たちなんです。そうした意味で、私はさきほどからいっているように、経済学なんていうのは、そう気楽に政策に加担できるもんじゃなくという認識をもっとはつきり持った上でやるべきだと思うのですよ。経済学の危機だとか、新しい経済学を求めてなんていうのは醜態もいところで、危機に陥っている現体制を喜ばせるだけです。全然、社会科学的でも何でもありません、何かしら新しい経済学とかやらで政策加担して、また失敗して、さらに新しい経済学を求めていうことをいい出すのがオチじゃないですか。相当きちんと経済学やってるはずの人までが、どんどんと変になって行くのを見てると、おかしいやら、馬鹿馬鹿しいやら……

高藤 地域主義というのは本来農村の問題じゃなくて、都市における新生活運動みたいなものが基本なわけですよ。それを農村でさらに何か行政的に利用しようという姿勢が出て来てるんでしょうが、そういう意味ではなかなか難しいですね。

大川 行政の側っていうか、権力の側にとつて、本当にそういうムードっていうのが全体的に出てくるってことは非常に都合がいいんですね。住民運動でもムードとして出て来たものをすりかえて行こうとしているわけですから、その部分を村研ではどういう形でつかまえて行くかっということは大事ですよ。

安孫子 そうした傾向は歴史学のなかにも入って来てますね。郷土史と地方史と地域史の三つを並べて、郷土史も地方史も駄目で、地域史でなければ駄目だということが、『大月市史』の序文に書いてありま

したがね。地方史と地域史とがとくに区別できるんですね。何かはやりっていうか、こうパーッとあっちこっちで出て来ていますね。

岩本 地域史とか地域主義とかいう人たちの考え方をみると、単一産業主義っていうのか、非常に視野が狭いんですね。杉岡さんの場合をみても、輪島塗とか、中山道妻籠の街道集落の復元といったある地域の特長な部分だけを取り上げて、それがうまく行っているから、地域主義のお手本になるっていうんですが、確かにそうした地域で、そういうものがある程度成功したということ自体は御同慶にたえないわけだけども、だからといって、地域主義ってそんなところを狙っていいいいんですかね。手づくりの輪島塗だって、妻籠の集落だって、さきほど高島の有機農法研究会に出された批判がそのままではまると思います。もちろん、地域主義者である杉岡さん自身は、みずから所信をもって横浜市で地域主義実現のために格闘してるっていうんですけれど、果して評論家を業としている杉岡さんが横浜のようなところでの地域主義のケルンになれるのかっていうことになる、私は疑わしいと思うんですね。まあ、彼が地域主義実現のために、人々はみんなそれぞれの場所で、それぞれの従事している仕事においてやればいいんだといっているのは一般論としてはわかりますがね。たしかに今の日本では中央集権の弊害があるわけですし、地方自治の確立にあってまず地方分権が重要だということもわかりますけど、だからといって、そのいうところの地域主義でやって一体何が出て来るんでしょうか。そこところがもう一つはつきりしません。私にとって、いぜんとして、いままぜ地域主義なのかという疑問が、いままぜ共同体の復権なのかという疑問とともにあるんですね。

安孫子 新しいこといえば、格好いいですからね。

菅野 この共同体の復活っていうことになってくると、結局、今まで共

共同体論を盛んにやって来たようにみえながら、その実はちっともキチンとやっていなかったということになるんだと思いますね。

安孫子 それははっきりしてますね。

岩本 私はいつも村研で共同体の問題、ちゃんとやるようにいって来んでですけど、どうもあいつまたあんなこといってるといった受け取り方方に終始してましたよね。

安孫子 この前、私が『伝統と現代』第四三号に、「中村吉治の共同体論」を書いたときに、一番はじめに共同体というのは歴史でしかつかまえないと書いたのはね、今にしてみると、あれこそ歴史的産物だと思えます。歴史じゃなくて、さっきの生態系循環が農業の原型だというのが同じで、人間生活の原型＝共同体みたいな考えがあるわけでしょう。そういうとらえ方がまかり通るような間違ってというのは、共同体の研究は結局、何も定着しなかったんだという感じがするわけですね。

菅野 私も一寸やっぱり今の風潮は解せないですね。私なんか共同体なんてさっぱり勉強して来ないんだけど、その辺はそんなふうには理解していませんがね。

安孫子 欧州共同体なんてのもありますからね。

岩本 杉岡さんはさすがに地域主義は共同体を基盤にしないっていうか、共同体は過去のものという認識があるようだけど、中村尚司さんの場合は、E.C.どころか宇宙船地球号なんてことまでいい出すわけでしょう。こうなると、もうとにかくどうしようもないですね。これはまあ別のところで大いに批判してやろうと思ってますが、実際、こんな形で共同体論を展開しなければならぬことは、正直いってあんまり気乗りがしないですね。ただ、黙っておくと、どうもとんでもない方向に行ってしまうそうですから、やるだけのことはやっておく必要は

あると思ってますが、形勢は我に利あらずですか、流行にさからうという意味ではね。まあ、前から流行にさからっているんで、さからうこと自体いまさら別に何とも思ってますが、何しろさからうといっても相手があまりにも違ってきているんですから、驚いてしまいいすよ。だから、いつまで経っても私なんかのやっているのは、悪しき共同体論ということなんでしようね。以前は以前で、共同体のような時代遅れのをやって後向きだっていわれ、今度は共同体を否定的にしか評価しないっていうんでね。しかし、私にはかつてマイナス・イメージを持つものとして受け取られていた共同体が、なぜ突然プラス・イメージを持つものに転化したのか、その契機みたいなものが理解できないですね。共同体を研究したからといって、その歴史的意義は別として現代においてそれを肯定することにはならないはずなんですけどね。

菅野 何か今日の研究会は批判精神だけが旺盛で、それに終始したような形になってしまいましたね。

岩本 でも、ここで出たようなことは、当然いわれてしかるべきなんじゃないでしょうか。むしろ、こういう形になってよかったと思いますよ。

斎藤 それではだいぶ時間も経ちましたので、このあたりで、今日の研究会を終らせて頂きます。

(文責―岩本)